

日光社と湯川川流域の仏教文化

有田川町上湯川の日光山（標高1110m）の山中に、江戸時代まで日光社という神社がありました。最も盛えたころには多数の建物があったようですが、明治時代に廃絶し、現在は小さな祠ほこらが再建されています。祭られた神様の名前をはじめ不明な点が多い謎の神社ですが、そのかつての景観を示す貴重な資料として日光社参詣曼荼羅まんだら（和歌山県指定文化財）が残されています。

縦148.7cm、横117.8cmの大画面の中央に、瑞垣みずかきに囲まれた社殿三棟と二つの堂舎が並び、その外に多宝塔が建っています。上方には三つの山（中央が日光山、右が護摩壇山、左が高野山と考えられている）がそびえ、下方には湯川川とその流域の集落や寺社が描かれています。

この参詣曼荼羅に描かれた湯川川流域の上湯



川地区と下湯川地区は、古くから日光社の信仰に深く関わっていたと考えられますが、近年における県立博物館の文化財調査によって、上湯川地区の薬王寺、下湯川地区の牛蓮寺ごうれんじ、下湯川観音堂に平安時代の仏像や戦国時代の版木など、重要な資料が残されていることが分かりました。



例えば下湯川観音堂の僧形坐像ざざう（室町時代。像高さ17.7cm）は、蓮の花の上に合掌した僧が座る珍しいもので、これは菩薩面ぼさつめんを着けた人々が練り歩く来迎会式らいげいしきで用いられるものです。県内では有田市得生寺の来迎会式が有名ですが、日光山麓の集落でも、かつて来迎会が行われていたことを示す貴重な文化財と言えるでしょう。

こうした新たに確認された文化財は、和歌山県立博物館の企画展「有田川中流域の仏教文化」（3月5日まで）で紹介されていますので、ぜひご覧ください。

先月の広報ありがたわ (134号) についての補足説明

御田を演じる配役は、舅しゅうと・聾むじ・太鼓打ち・牛・田植子・座謡ざうたいがありますが、田植子については久野原区では「早乙女」ともされています。